

# 外郎売り (ういろうり)

せつしやおやかたともうすは、

拙者親方と申すは、

おたちあいのうちに、

お立会の中に

ごぞんじのおかたもござりましようが、

御存じのお方もござりましようが、

おえどをたつて にじゅうりかみがた、

お江戸を発つて二十里上方、

そうしゅうおだわら いっしきまちを おすぎなされて、

相州小田原一色町をお過ぎなされて、

あおもちようを のぼりへ おいでなされるれば、

青物町を登りへおいでなされるれば、

らんかんぼしとらやとうえもん ただいまは ていはついたして、

欄干橋虎屋藤衛門、只今は剃髪致して、

えんさいとなのりまする。

円齊と名のりまする。

がんちようより、おおつこもりまで、

元朝より、大晦日まで、

おてにいれまする このくすりは

お手に入れまする此の薬は、

むかし ちんのくにのとうじん、

昔ちんの国の唐人、

ういろうというひと、

外郎という人、

わがちようへきたり

わが朝ちようへ来たり、

みかどへ さんだいのおりから、

帝へ参内の折りから、

このくすりを ふかくこめおき、

この薬を深く籠め置き、

もちゆるときは いちりゅうずつ、

用ゆる時は一粒ずつ、

かんむりのすきまより とりいだす。

冠のすき間より取り出いだす。

よつてそのなをみかどより、

依つて、その名を帝より、

とうちんこうとたまわる。

「とうちんこう」と賜わる。

すなわちもんじには、

即ち文字には、

いただき、すく、においと書いて「とうちんこう」ともうす。

「頂き、透く、香い」と書いて「とうちんこう」と申す。

ただいまはこのくすり、

只今はこの薬、

ことのほか せじょうにひろまり、

殊の外ほか、世上に弘まり、

ほうぼうににせかんばんをいだし

方々に偽看板を出し、

いや、おだわらの、はいだわらの、さんだわらの、すみだわらのと、いろいろもうせども

イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと、いろいろに申せども、

ひらがなをもつて「ういろう」としるせしは、おやかた えんさいばかり。

平仮名をもつて「ういろう」と記せしは、親方円齊ばかり。

もしやおたちあいのうちに、

もしやお立会いの中に、

あたみかとうのさわへ、とうじにおいでなさるるか、

熱海か塔の沢へ、湯治にお出でなさるるか、

またはいせごさんぐうの おりからは、

又は伊勢御参宮の折からは、

かならずかどちがいなされますな。

必ず間違いなされますな。

おのぼりならばみぎのかた、

お登りならば右の方、

おくだりなればひだりがわ

お下りなれば左側、

はつぼうがやつむね、おもてがみつむねぎようくどうづくり。

八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り。

はふには きくにきりのとうの こもんごしやめんあつて

破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あつて、

けいずただしきくすりでござる。

系図正しき薬でござる。

いやさいぜんよりかめいのじまんばかりもうしても、

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、

ごぞんじないかたには、しょうしんのこしよのまるのみ、しらかわよふね、

さらば いちりゆうたべかけて、そのきみあいをおめにかけますよう。

さらば 一粒食べかけて、その気味合いをお目にかけますよう。

まずこのくすりを、かようにいちりゆう したのうえにのせまして、

先ずこの葉を、かように一粒舌の上のせまして、

ふくないへおさめますると、

腹内へ納めますると、

いや どうもいえぬは、

イヤどうも言えぬは、

い・しん・はい・かんがすこやかになりて

胃・心・肺・肝がすこやかになりて

くんぷうのんどよりきたり、こうちゅうびりようをしようずるがごとし

薫風候より来たり、口中微涼を生ずるが如し。

ぎよちよう・きのこ・めんるいのくいあわせ、

魚鳥・茸・麵類の食い合わせ、

そのほか、まんびようそつこうあることかみのごとし。

その外、万病速効ある事神の如し。

さて、このくすり、

さて、この薬、

だいいちのきみようには、

第一の奇妙には、

したのまわることが、ぜにごまがはだしでにげる。

舌のまわることが、銭ゴマがはだしで逃げる。

ひよつとしたがまわりだすと、

ひよつと舌がまわり出すと、

やもたてもたまらぬじゃ。

矢も楯もたまらぬじゃ。

そりやそりや、そらそりや、まわってきたわ、まわってくるは。

そりやそりや、そらそりや、まわってきたわ、まわってくるわ。

あわやのんど、

アワヤ候、

さたらなじたに、かげさしおん、

サタラナ舌に、カ牙サ歯音、

はまのふたつはしんのけいちよう、かいこうさわやかに、

ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、

あかさたなはまやらわ、おこそとのほもよろお。

アカサタナハマヤラワ、オコソトノホモヨロオ。

ひとつへぎへぎに、へぎほし、はじかみ、

一つへぎへぎに、へぎほし、はじかみ、

ぼんまめ、ぼんごめ、ぼんごぼう

盆豆、盆米、盆ごぼう、

つみだて、つみまめ、つみざんしょ、

摘蓼 摘豆 つみ山椒、

しよしやざんのしやそうじよう

書写山の社僧正、

こごめのなかがみ、こごめのなかがみ、こんごごめのこなながみ、

粉米の生噛み、粉米の生噛み、こん粉米の小生噛み、

しゆす・ひじゆす・しゆす・しゆちん、

濡子・ひじゆす・濡子・濡珍、

おやもかへい、こもかへい、  
親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、  
おやかへいこかへい、こかへいおやかへい、  
親かへい子かへい、子かへい親かへい、  
ふるくりのきのふるきりくち、  
古栗の木の古切口。  
あまがつばか、ばんがつばか、  
雨合羽か、番合羽か、  
きさまのきやはんもかわきやはん、  
貴様のきやはんも皮脚絆、  
われらがきやはんもかわきやはん、  
我等がきやはんも皮脚絆、  
しっかわばかまのしっほころびを、  
しっかわ袴のしっほころびを、  
みはりはりながに ちよとぬうて、ぬうて ちよとぶんだせ  
三針はり長にちよと縫うて、縫うてちよとぶんだせ、  
かわらなでしこ、のせきちく、  
かわら撫子、野石竹、  
のらによらい、のらによらい  
のら如来、のら如来、  
みのらによらいにむのらによらい、  
三のら如来に六のら如来。  
ちよととさきのおこぼとけに、おけつまずきやるな、  
一寸先のお小仏に、おけつまずきやるな、  
ほそどぶにどじよによるり。  
細溝にどじよによるり。  
きようのなまだら、ならなままながつお、ちよとしこかんめ、  
京のなま鱈、奈良なま学鯉、 ちよと四、五貫目、  
おちやたちよ、ちやたちよ、ちやつとたちよ、ちやたちよ、  
お茶立ちよ、茶立ちよ、ちやつと立ちよ、茶立ちよ、  
あおたけちやせんて おちやちやとたちよ。  
青竹茶筌でお茶ちやと立ちよ。  
くるはくるはなにがくる、  
来るは来るは何が来る、  
こうやのやまのおこけらこぞう、  
高野の山のおこけら小僧、  
たぬきひやっぴき、はしひやくせん、てんもくひやっぴい、ぼうはっぴやっぴん  
狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。  
ぶぐ、ばぐ、ぶぐ、ばぐ、みぶぐばぐ、  
武具、馬具、ぶぐ、ばぐ、三ぶぐばぐ、  
あわせてぶぐ、ばぐ、むぶぐばぐ、  
合わせて武具、馬具、六ぶぐばぐ、

きく、くり、きく、くり、みきくくり、  
菊、栗、きく、くり、三菊栗、

あわせてきく、くり、むきくくり。

合わせて菊、栗、六菊栗、

むぎ、ごみ、むぎ、ごみ、みむぎごみ、

麦、ごみ、むぎ、ごみ、三麦ごみ、

あわせてむぎ、ごみ、むむぎごみ。

合わせてむぎ、ごみ、六麦ごみ。

あのなげしのながなぎなたは、たがながなぎなたぞ。

あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。

むこうのごまがらは、えのごまがらか、まごまがらか、

向こうの胡麻殻は、荏のごまがらか、真ごまがらか、

あれこそ、ほんのまごまがら。

あれこそ、ほんの真胡麻殻。

がらびい、がらびい、かざぐるま、

がらびい、がらびい、風車、

おきやがれこぼし、おきやがれこぼし、ゆんべもこぼしてまたこぼした。

おきやがれこぼし、おきやがれ小法師、ゆんべもこぼして又こぼした。

たあふぼぼ、たあふぼぼ、ちりから、ちりから、つつたつぽ、

たあふぼぼ、たあふぼぼ、ちりから、ちりから、つつたつぽ、

たつぽたつぽいっちゃうだこ、おちたらにてくお

たつぽたつぽ一丁だこ、落ちたら煮て食お、

にてもやいてもくわぬものは、

煮ても焼いても食わぬ物は、

ごどく、てつきゅう、かなくまどうじに、いしくま、いしもち、とらぐま、とらぎす、

五徳、鉄きゅう、かな熊童子に、石熊、石持、虎熊、虎きす、

なかにも、とうじのらしょうもんには

中にも、東寺の羅生門には

いばらきどうじが、うでくりこんごうつかんで おむしやる。

茨木童子が、うで栗五合つかんでお蒸しやる。

かのらいごうのひぎもとさらず。

かの頼光のひぎもと去らず。

ふな、きんかん、しいたけ、さだめてごだんな、

鮒、きんかん、椎茸、定めて後段な、

そばきり、そうめん、うどんか、ぐどんなこしんぼち、

そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発知、

こだなの、こしたの、こおけに、こみそが、こあるぞ、

小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、

こしゃくし、こもって、こすくって、こよこせ、

小杓子、こ持って、こ掬って、こよこせ、

おつとがってんだ、

おつと合点だ、

こころえたんぼのかわさき、かながわ、ほどがや、とつかは、はしつていけば、  
心得たんぼの川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は、走って行けば、  
やいとをすりむく、さんりばかりか、

やいとを摺りむく、三里ばかりか、

ふじさわ、ひらつか、おおいそがしや、こいそのやどを、

藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を、

ななつ おきして、そうてんそうそうしゅうおだわらとうちんこう、

七つ起きして、早天早々相州小田原とうちん香、

かくれござらぬ、きせんぐんじゅの、はなのおえどのはなういろう、

隠れござらぬ、貴賤群衆の、花のお江戸の花ういろう、

あれ、あのはなをみて おこころをおやわらぎやという。

あれ、あの花を見てお心をおやわらぎやという。

うぶこ、ほうこにいたるまで、

産子、這う子に至るまで、

このういろうのごひょうばん、

この外郎の御評判、

ごぞんじないとは もうされまいつぶり。

ご存知ないとは申されまいつぶり。

つのだせ、ぼうだせ、ぼうぼうまゆに、

角出せ、棒出せ、ぼうぼうまゆに、

うす、きね・すりばち、ばちばち、ぐわらぐわらぐわらど、

臼・杵・すりばち、ばちばち、ぐわらぐわらぐわらど、

はめをはずして、こんにちおいでのいずれもなまに、

羽目をはずして、今日お出でのいずれも様に、

あげねばならぬ、うらねばならぬと、

上げねばならぬ、売らねばならぬと、

いきせいひつぱり、

息せい引つぱり、

とうほうせかいのくすりのもどじめ、

東方世界の薬の元締め、

やくしにょらいもしょうらんあれと、

薬師如来も照覧あれと、

ほほ、うやまって、

ホホ、敬って、

ういろうは、いらつしやいませぬか。

ういろうは、いらつしやいませぬか。